



ラストミーティング

目次

ファーストミーティング	1
僕がやります	4
春の大会	7
夏の大会	11
監督ラストミーティング	16
キャプテンラストミーティング	18

ファーストミーティング

ドアの前に立ってから一度深呼吸した。拳を握って強めにドアをロックする。
中から「うおーい」と野太い声がした。
そこでドアノブを回しそっと開ける。ドアの隙間から汗の臭いとカビの臭いが混ざった酸い臭いが漏れてた。

ドアの隙間から中を覗くとパンツ一丁の男たち数人が、こっちに顔を向けている。
「キャッ」と声をあげ、慌ててドアを閉めた。
鼓動が激しくなり胸に手を当てる。
すぐにドアが開いて、一人の男が出てきた。体が自分の倍くらいある。
男はパンツ一丁のまま。目のやり場に困り俯いた。

「なんすか」

男が顔を覗きこんできた。

「こ、ここは東上学園の野球部の部室ですよね」

俯いたまま訊いた。

「そうっすけど、何か用っすか」

「わ、わたしは今日から野球部の監督になった種田です」

「えっ、マ、マジっすか？」

「あ、はい、マ、マジです」

男がじっと顔を覗きこんできた。顔を見ると、大男は険しい表情をしていた。

「ちょっと待って」

大男がそう言ってから部室の中に入り、ドアをバタンと閉めた。

閉まったドアの前に立ち尽くす。

中から声が漏れてきた。

「新しい監督来たけど、バカっばい女だぞ」

「えっ、今度の監督って女かよ」

「そいつ野球知ってんのか」

「マジかよ」

「ざけんなよ」

「もう、やる気なしだわ」

「俺、野球部辞めるわ」

「野球部は学校に見捨てられたわけ」

中から漏れる声を聞いてるうちに、体がだんだん小さくなっていく。このまま立ち去りたい気分だ。

しばらくすると、部室のドアが開いて、最初の男が顔を覗かせた。

「とりあえず、グラウンドで待ってて」

男はそう言うと、すぐドアを閉めた。

真っ白なユニフォーム姿の大男たちの前に立たされ、足が震えた。呼吸するのも苦しくなる。

「きょ、今日からこの学校の野球部の監督になりました種田未来です。よろしくお願いします」

新入生のような挨拶をして、深々と頭を下げる。緊張して顔が強ばっているのが自分でもわかる。

顔を上げて、前に並ぶ大男たちを見渡す。

彼らは未来の方に顔を向けていない。後ろ手に組んで下を向いている者、腰に手を当て空を見上げてる者、腕を組み宙を見ている者、さまざまだが未来の話に耳を傾けている者は誰一人いない。

「あんたが監督すんの」

ユニフォームに牧野と書いた男が訊いてきた。部室で最初に会った大男だ。

「ええ、そうよ。よろしくね」

出来るだけ笑みを作った。

「あんた、野球知ってんの」

牧野がきつく冷たい視線を向けてきた。

「ごめんなさい。野球は全くの素人なの。でも、これから一生懸命に勉強するわ」

「バカにすんなよ。俺たちは引退まで残り三ヶ月なんだよ。三ヶ月後には高校最後の大事な大会があるんだよ。それまでに野球のこと覚えられるわけねえだろ」

牧野が怒りを露にした。

「でも、一生懸命に勉強するから……」

必死で訴えようとするが、言葉を遮られる。

「野球をなめんなよ。俺たちは小さい時から野球やって甲子園目指してたんだ。十年以上、毎日毎日野球やってきたんだ。それでもうまくいかねえんだぞ。それをたった三ヶ月で覚えられるわけねえだろ」

ユニフォームに高塚と書いた男が喚いた。

「野球をなめてるつもりはないの。出来るだけあなたたちの力になれるようにと思ってだけ」

高塚の方に顔を向けた、

「お前らのそういうのがうぜえんだよ」

牧野が言った。

「ごめんなさい。でも、本心よ。あなたたちの力になりたいの」

「じゃあさ、あんたが俺たちを甲子園に連れて行ってくれるわけ。前の三次監督は甲子園に連れて行く約束で俺たちをここの高校に誘ってきたんだ。女子高だったここが男女共学になった年に、俺たち三年生は三次監督に誘われたからここにた来たんだ。いっしょ

に甲子園に行く約束でな。本当なら他の高校で甲子園を目指すつもりだったのに、それを断ってここに来たんだぞ。俺たちの高校生活すべてが残り三ヶ月にかかってんだぞ」

牧野の最後の言葉は怒りを露にして喚いていた。

「三次監督の件は残念だったけど、わたしが三次監督の後を引き継いだ以上、あなたたちの夢が実現できるよう協力するわ」

「あいつ、酒飲んで車で事故起こしたんだろ。あいつもふざけんなよな。俺についてくれば甲子園に行けるなんて言っといて、何やってんだよ。学校もいい加減にしろよ。これからは野球部に力を入れるとか言っときながら、三次が問題起こしたら尻込みして、野球経験無しの女を監督にすんだからな。野球部に力を入れて俺たちのこと考えてくれるんなら、野球経験者を連れてくるのが普通だろ。なんであんたが監督なんだよ」

「ごめんなさい。学校がどうしてわたしを野球部の監督にしたのかはわからないわ。でも、わたしは出来る限りのことはやるつもりよ」

「もういいよ、あんたは適当にやっとして。俺たちで何とかするから。みんな、さっさと練習しようぜ」

男たちは「ほーい」と言ってグラウンドに散って行った。

僕がやります

「監督、これから誰がノックやるんすか」

キャプテンの牧野奨太が訊いてきた。未来はノックの意味がわからなかった。

「ノックって？」

「はあ、あんた野球部の監督でしょ。なんでノックもわかんないの」

「ごめんなさい。最初にも言ったけど野球のことは全く知らないの」

「そんなんで、よく野球部の監督引き受けたよね。引き受けたなら、予習くらいしてこいよな。俺たち生徒には授業の予習してくるように言うくせによ」

「ごめんなさい。今日の朝言われたばかりで、予習する時間もなかったの」

「なんで、引き受けんだよ」

「新米教師だから断れなくて」

「断れよな。迷惑すんのは俺たちなんだから」

「でも、引き受けた以上は一生懸命やらせてもらうわ。だから、ノックってどういうものか教えてくれる」

「守備練習だよ。三次監督がいた時は監督がノックバット握って守備につく俺たちにボールを打ってくれたんだよ。あんたはそれ出来ねえだろ。これから誰にしてもらうか決めねえと試合どころか練習も出来ねえわ」

「わたしもノックが出来るように練習するわ」

「野球をなめんなよ。そんなすぐに出来るわけねえだろ」

「ノックってそんなに難しいの」

「俺たちにとっちゃ難しくねえけど、あんたには難しいわ。今さら練習しても無理だな」

「でも、練習するわ。少しでもあなたたちの役に立ちたいから」

「ムリムリ、邪魔なだけだからやめてくれる。レギュラーじゃない一年と二年に頼むから」

「一年生と二年生で出来るの」

「三次が抜けてからしばらくは二年にやってもらってたからな。けど、これから夏に向けてずっとノックだけやらされる奴は守備練習ができねえわけだから文句言いたいだろうけど、まあ仕方ねえよ。これもあんたのせいだからな」

「みんなで順番にしたらいんじゃないかしら」

「そんなことしたら、全員がぶちギレるわ。誰か一人を犠牲にするしかないわ。俺が誰にするか決めるから、そいつには監督から言ってくれな」

「わ、わかったわ。その子、ちょっとかわいそうな気もするけど」

「かわいそうなのは、俺たち野球部全員だ。特に三年は最悪だ。それって、あんたのせいだから、あんたがかわいそうなんてこと口にすんなよな。ムカツクからさ」

「ごめんなさい。みんな一生懸命なのに、邪魔することになっちゃって」

未来は頭を下げた。

「それからスターティングメンバーとかは誰が決めるの」

「スターティングメンバーって？」

「ハァー、面倒臭いな。最初に試合に出る選手だよ。試合が始まったら代打や代走や守備変更とかも考えなきゃいけないし、試合中のサインも出さなきゃいけない。監督がこんなんじゃないでしょうねえわ」

「それをわたしがやらなきゃいけないのね」

「だけど、ルールも知らねえのに出来るわけねえだろ」

「そうね、今から出来るだけ早くルールも覚えるわ」

「いいよ。絶対無理だし。これからは俺が決める。だから、監督は俺が決めたスターティングメンバーに文句言う奴がいたら、監督の権限でボコボコに殴り飛ばしてくれよ」

「そんなことしたら、教師やめさせられるわよ」

「いっそのこと、やめさせられてほしいんだけど。まあ、それはいいわ。とりあえず、これからは俺が監督代行するから、あんたは黙って見ててくれ。トラブルが起こった時に責任とってくれるだけでいいから」

「トラブルって」

「そんなのわかんねえよ。俺が監督代行になったら文句言う奴も出てくるだろうから、トラブルになることもあるかもしんねえだろ」

「けど、出来るだけ同じチームなんだから仲良くやりましょうね」

「仲良くって遊びじゃねえし、それに俺が仲良くするつもりでも、向こうがどんな態度とってくるかわかんねえからな。レギュラーはずされて怒る奴もいるだろうしな。その時はやるしかねえだろ」

牧野はボキボキと指を鳴らした、

「レギュラーってそんなに大事なことなの」

「当たり前だろ。試合に出れなかったら、野球部にいる意味ねえからな。だからみんな必死で練習してきたんだ。レギュラーになって甲子園に出て活躍するために俺たちは厳しい練習を毎日やってきたんだ。それなのに新米で断れないからっていうあまっちゃろい理由で監督引き受けて野球部に入ってきてもらっちゃ困るんだよ」

「甲子園に出ることってそんなに大事なことなの」

「あんたにはわからねえよ」

「三次のせいで辞めた奴も多いし、一年の入部希望者は五人しかいねえし、最悪だ」

牧野は持っていたバットを叩きつけて、その場から去って行った。

牧野の怒る背中を見送った。これからどうしたらいいのか、未来には全く見当がつかない。

未来は「ハァー」と肩を落とした。

「監督、大変そうですね」

背中から声がして振り向くと、真っ黒に日焼けした丸坊主頭の男子が真っ白な歯を見せて近づいてきた。野球部の中では小柄な方だ。

「えっと、あなたは」

未来はユニフォームに書いてある名前を覗きこんだ。

「僕は川田です。新二年生です」

川田はユニフォームに書いた名前を未来に向けた。

未来はそれを覗きこんだ。

「川田君ね、覚えたわ」

「もし良ければ、ノックとか、僕がやりましょうか」

「そうしたら川田くんは守備練習が出来ないじゃないの。それでもいいの」

「僕はどうせ補欠だから、その方がみんなのためになりそうだし、監督もその方がいいでしょ」

「川田くんがやってくれるなら、それはありがたいんだけど」

「僕からキャプテンに言ってみます。キャプテンも誰に決めるか大変だと思うんで、僕から志願してみます」

「川田くん、ごめんなさいね。わたしのせいで守備の練習が出来なくなるわけよね」

「種田監督のせいじゃないです。三次監督のせいですよ。それから野球のルールを覚えるんだったら、僕の持ってる本を貸しますよ。小学生の頃に父さんから買ってもらったやつがありますから」

「お父さんから買ってもらった大切な本なのにいいの」

「いいですよ。今はほとんど見てないから。父さんもその方が喜んでくれると思います。父さんは僕が甲子園に出て活躍する姿を見るより、僕が他人からありがとうって言われてる姿が見たいって言ってましたから」

川田はニコリと白い歯を出した。

「川田くん、ありがとう。いいお父さんね。川田くんはお父さんが大好きなのね」

「でも、僕が甲子園で活躍する姿を父さんに見せたかったです」

「これから頑張ればいいじゃない。甲子園目指して頑張りましょうよ」

未来はニコリと笑みを浮かべ、胸の前で両拳を握った。

「そうですね。父さん天国からでも見てくれるかな」

川田が空を見上げた。

未来は言葉を失った。返す言葉が思い浮かばない。川田の目を見ると潤んでいた。

春の大会

東上学園高校野球部の春の大会初戦の相手は、県立の進学校城山高校だ。未来監督にとっては初めての野球部の公式戦になる。

東上学園は二回の攻撃でワンアウト一塁、三塁と先制のチャンスをむかえたが、九番打者所沢がスクイズ失敗して得点機を逃した。

相手バッテリーは、スクイズのサインを見破り、投球をピッチアウトした。所沢はピッチアウトされたボールに飛びついてなんとかバットにボールを当てたが、ボールは所沢の真上に上った。相手ピッチャーがダッシュしてそのボールをキャッチした。これでまず所沢がアウト。そのあとピッチャーは三塁にボールを投げた。三塁ランナーの太田は戻りきれずアウトとなりダブルプレーになった。

「なんで、スクイズのサインなんや」

スクイズでピッチャーフライを打ち上げてしまった所沢が口元を歪めた。

「失敗したくせに偉そうなこと言うな。あのままお前に打たせたところで、外野フライすら打てねえだろ。バット振っても当たらねえんだからよ、スクイズにしてやったんだよ。それなのに、バットに当てたはいいが、ポーンとしょうもないフライ打ち上げやがって。ダブルプレーって一番最悪やわ」

キャプテンの牧野が所沢を睨みつけた。

「向こうのバッテリーにピッチアウトされたんやから仕方ないやろ。あんな高いボール、バットに当てんのが精一杯やで。お前のサインの出し方が下手やから、相手バッテリーにスクイズがバレてんのよ。バレバレのスクイズのサイン出されたら成功できるわけねえよ。それとな大田、あれはサードに戻れたやろ。戻ってたらダブルプレーにならなかったのよ。チンタラ戻ってるからアウトになるんや」

所沢は三塁ランナーだった太田にもキレた。

「お前のスクイズが信用できねえから、早めに突っ込むしかねえんだよ。お前はスクイズでも空振りの可能性高いし、バットに当てたとしても、これまでピッチャー正面のゴロばかりやったやろ。それでセーフになろうと思ったら、ホームスチール決めるくらいのスタートじゃねえとムリなんやからな。こっちはお前が下手過ぎるから、フォローに大変なんやで。なのに、まさか打ち上げるとはほんま最悪や」

今度は太田がキレた。

「なんやと」

所沢が太田の胸ぐらを掴んだ。太田も所沢の胸ぐらを掴む。二人が睨みあう。

「あなたたちやめなさい。喧嘩はよくないわ。ダメだったことは仕方ないわ。また、練習して上手くなりましょうね」

未来が所沢と太田の間に入って二人を引き離した。

「監督がしっかりしねえから、こんなぐちゃぐちゃなんだよ」

「こんなんじゃ勝てるわけねえ。監督、練習やってもムダや。あんたが野球知らねえんだからさ」

所沢と太田は二人そろって未来に怒りをぶつけた。

ピッチャーの横山が連続ファーボールからセンター前にタイムリーヒットを打たれ先制点を許した。

「あー、疲れたー。横山、お前、ストライクくらい取れよな。ファーボールばっかじゃねえか」

ベンチに帰ってきた植田が横山に向かって言って、グラブをベンチに叩きつけた。

「さっきのセンター前ヒット、あれは普通のセカンドやったらセカンドゴロやで。あれをヒットにされたらピッチャーはたまらんわ」

横山が誰に聞かせるでもなく、一人言のように言って、ベンチにドーンと腰をおろした。

「なんやとー、ファーボール連発して、俺らの守備のリズム崩したくせにヒット打たれたんもこっちのせいにするんか。横山ええ加減にせえよ」

横山の言葉を聞いたセカンドの都筑が反応し、ベンチに座る横山の前に立って、彼の胸ぐらを掴んだ。

「ほんまのことやろ。お前は守備範囲が狭すぎて下手すぎや」

横山は胸ぐらを掴まれたまま都筑をじっと睨んだ。

「あなたたち、やめなさい。仲良くしましょうよ。同じチームなんだから、まずは仲良くね」

未来がそう言って、横山の胸ぐらを掴む都筑の右腕を引き離した。

「監督は引っ込んでろや。なんも出来ひんのやから」

都筑が未来を睨みつけた。

「どっちもどっちや。横山はストライク入らへんし、都筑は下手くそやし、監督は野球知らんしな。こんなチームはどうしようもないわ」

牧野が帽子を浅く被りベンチにふんぞり返って座った。

東上学園がチャンスを作った。牧野と高塚が連続ヒットで出てワンアウト一塁、二塁だ。

しかし次のバッターの太田はピッチャーゴロでダブルプレー。またまたチャンスを逃す。

「太田、中途半端なバッティングしやがってよー。なんやねん、あのへっぴり腰なバッティング。せっかく俺がチャンス広げたのによ。それにファーストまで全力疾走せえよ。あんな当り損ねのポテポテの打球でなんでダブルプレーなんねん」

二塁ランナーだった高塚がベンチに返って太田の尻を蹴った。

「いってえー、やめんか」

太田は高塚を睨みつけた

「やかましい、下手くその鈍足野郎」

高塚はそう言ってサードの守備位置に向かった。

「お前の方が下手やないかー」

太田はサードの守備位置に向かう高塚に怒鳴った。

春の大会の初戦の東上学園高校と城山高校の試合は、結局五対〇で東上学園は負けた。

「また、負けたわ。お前らほんまにしっかりせえよ」

牧野がベンチに引き上げたみんなに言った。

「牧野、負けたのは俺たちの責任みたいな言い方するけど、お前にも責任はあるやろ。なのになんでそんな偉そうなんや」

ピッチャーの横山が言った。

「城山の貧打線に五点もとられたピッチャーが偉そうに言うな」

牧野が横山に言い返す。

「打つ方かて一点もとってへんのやから、そっちの方が問題やろ。城山のピッチャーの球が打たれへんかったら、どんなピッチャーも打たれへんで」

「フン、お前の球やったら打てんのかな。ヘボボールやからな」

「なんやとー」

「やめなさい、さあ帰るわよ」

未来が牧野と横山に言った。

「監督は負けて悔しくないんすか」

牧野が言った。

「そりゃ、悔しいよ」

未来が牧野を見上げた。

「悔しそうには見えへんわ。まあ、しゃーないか、監督は野球のルールもわかってへんし、無理やり監督やらされてるだけで野球に興味ないもんな。俺ら東上学園が勝ち進むよりさっさと負けてくれた方が楽やもんな」

牧野は未来と目を合わせようとせずに遠くを見ながらいった。

「そんなことないわよ。一生懸命応援してるし、勝ってほしいわよ」

未来は涙をグッと堪えた。

「じゃあさ、今日の負けに対して、俺たちにバツを与えんのか」

「バツ？」

未来が首を傾げた。

「ああ、三次監督は、俺たちが不甲斐ない負け方したら、全体責任でみんな学校に帰ってからバツがあった。グラウンドで全員正座させられたり、学校の周りを十周走らせられたり、うさぎとびでグラウンド一周させられたり、いろいろバツがあったで」

「みんな一生懸命やった結果だから、バツはダメよ」

「そんなあまっちょろいことで、これから俺たちは勝てんのか？ 監督、春はまだいいけど、三ヶ月後の夏は絶対に負けられへんのやぞ。わかってるやろうな、目標は甲子園出場やぞ。俺たちはその約束でこの学校に来たんやからな。約束は守れよ。俺たちの高校三年間をムダにするなよ。絶対やぞ」

牧野が未来の鼻先に人差し指を向けた。

夏の大会

『夏の甲子園出場をかけた熱い戦いがはじまります。東上学園高校対光陰高校の試合がまもなくプレーボールです』

東上学園一番高山がバッターボックスへゆっくりと向かった。緊張しているのか少し表情が固い。

「タカヤマー、リラックス、リラックス、いつも通りいけー」

次のバッターの植田が高山に声をかけた。

「高山くん、頑張ってー」

未来が両手でメガホンを作り、腹の底から声を出した。東上学園野球部の監督になってから未来の声は大きくなった。三ヶ月前はすぐ喉を潰してしまい、声が出なくなったが、今は平気だ。

『空振りサンシーン、光陰高校エース坂根くん、伸びのある得意のストレートで東上学園一番の高山くんから三振を奪いました』

「高山、ドンマイ、ドンマイ。次だ、次の打席でやり返せ」

牧野がベンチに下がる高山の背中を叩いた。

未来は、笑顔を見せる牧野のその姿を見て嬉しくなった。

『一回表、東上学園の攻撃は三者凡退に終わりました。光陰高校エースの坂根くん絶好の立ち上がりです』

光陰高校のナインがベンチに下がっていく。みんなが坂根に向かって「ナイスピッチー」と声をかけ坂根の肩を叩いたり、お尻を叩いたりしている。

「さあー、こっちもしまっていこー」

牧野がグラブを手に持ち、みんなに声をかけベンチを飛び出した。続いて東上学園のナインたちが守備位置に散った。

「さあ、みんなー、暑いけど元気出していきましょう。体に気をつけてねー」

未来がナインを送り出した。

「よっしゃー、いくぞー」

「監督、先輩たち、楽しそうですね」

川田はベンチの前に立って守備位置についた先輩たちを見渡した。

「みんな、野球が大好きだからね。野球の試合ができて嬉しいのよ」

未来も守備についたナインを見渡しながら言った。

「でも、三次監督の時は先輩たちこんなじゃなかったです」

川田が口を尖らせた。

「そうなの？」

未来が川田の顔を見た。目にうっすらと涙を浮かべている。

「去年まではベンチの中がギスギスしてました。その頃と比べると、今の先輩たちはすごく野球が楽しそうです。きっと、未来監督のおかげです」

「わたし、何にもしてないけどね。でも、今日は絶対に勝ってほしい」

「先輩たち、すごく楽しそうだから今日はきっと勝ちますよ」

『四回の表、東上学園はセンター前にヒットを放った一番の高山くんを二番の植田くんが送って、ワンアウト二塁のチャンスにクリーンナップをむかえます』

「植田、ナイスバント。あとは頼むで一、クリーンナップで先制点や」

ピッチャーの横山が手を合わせ祈っている。

『東上学園、この回はチャンスをつくりましたが、三番栗林くん、四番牧野くんが連続三振におさえられ得点には至りませんでした』

「せっかくお前がチャンス作ってくれたのに、スマン打てんかった」

牧野が高山に詫びた。

「あのピッチャー、クリーンナップむかえてからギアあげてきたからな。後ろから見てたけど、栗林と牧野に対するボールはキレッキレやったわ。ありゃなかなか打てんわ。敵ながらすげえピッチャーやで」

高山がヘルメットを脱いで汗を拭いた。

「高山くん、カッキーンってすごい打球だったね」

未来がバットでボールを打つ仕草をして笑った。

「まぐれ、まぐれ」

高山が右手を振って照れ笑いをした。

「まぐれであんな打球打てないよ。カッキーンてすごい音だったよ」

また、未来が打つ仕草を見せた。

「監督が暗くなるまで、ティーバッティングに付き合ってくれたおかげっす」

「ほんとに、あれって効果あったわけ」

未来が守備につこうとする高山の袖を引っ張った。

「監督、俺、守備つかないといけないから、離してくださいよ。審判に怒られますよ」

「そっか、そっか、ごめん、忘れてた」

未来が舌を出した。

「監督、楽しそうですね」

「うん、すごく楽しい。野球がこんなに楽しいとは知らなかった。これも川田くんのおかげ。ありがとう」

『ワンアウト一塁、三塁、東上学園先制のチャンスです。光陰高校の好投手坂根くんを攻め立てます』

「所沢、頼むから、打ってくれー」

高塚が叫んだ。

坂根がセットポジションから初球を投げる。

『スクイズだー。バッテリーはピッチアウトする。所沢くんがそのボールに飛びつく』

「ウワーッ」

ボールをはずされた所沢が声を上げた。必死でくらいつこうとする。

『所沢くんバットに当てたが、打ち上げてしまったー。キャッチャーがボールを捕る。そのまま三塁へ投げる。ダブルプレー。光陰高校ピンチをダブルプレーで切りぬけました』

「悪い、また打ち上げてしようた」

ベンチに戻ってきた所沢が牧野に頭を下げた。

「ドンマイ、ドンマイ、俺のサインが完全に読まれてたな」

「クソー、惜しかったねー」

未来が悔しそうに指を鳴らした。

『九回裏、ここまで両チーム、先発ピッチャーが踏ん張り無得点です。痺れる投手戦を繰り広げています』

「この回、守りきって延長に持ち込むぞ。ヒットはうちの方が多いし、押し気味なんだから、延長に持ち込めば、俺たちが有利だ。いくぞー」

牧野が九回裏の守備につく前にみんなに声をかけた。

ナインたちは九回裏の守備に散っていった。

「この回は気をつけないといけませんね」

川田が心配そうに言う。

「そうね、この回は下位打線からだけど、ここまで八番、九番にいい当たりされてるもんね。ここ出したら上位につながるからね」

未来がマウンドで投球をする横山を見つめた。

「監督、監督らしいこと言いますね」

川田が笑った。

「当たり前じゃない、わたし、東上学園高校野球部監督なんだもん」

「そうでしたね」

川田がまた笑った。

『光陰高校、サヨナラのチャンスです。八番の野々村くんがヒットで出て、九番の真鍋くんが一球で送りバントを決めました。ワンアウト二塁で当たっている一番豊田くんにまわしました。ここで、東上学園は守備のタイムを取ります。二年生の川田くんがベンチからマウンドに向かいます』

「ここは、敬遠で次のバッターと勝負やな」

牧野が言った。

「でも、三番にまわるぞ」

高塚が言った。

「そうだな、うーん、けど、今日は一番の方が怖い気がする。栗林、近くで見てどう思う？」

「牧野の言う通りだな。三番の方が横山にタイミングが合っていないわ」

「よし、敬遠だ。川田、監督に伝えといて。それと敬遠の意味知ってるか訊いといてくれ」

牧野が笑いながら言った。

「わかりました」

川田も笑いながら返事した。

「二番でゲッツーとれたら、最高やけどな」

高塚が言った。

「確かにな。けど、欲張ると危険だ。二番は横山に完全にタイミングが合っていないから三振取りにいこう。横山、下手にゴロ打たそうとして攻めかた変えるとやられるぞ」

牧野が横山の肩に手を置いてグラブを口に当てて言った。

「そうだな」

横山が持っているボールを見つめた。

『サンシーン、横山くん、フォークボールで二番酒田くんを三振にとりました。これでツーアウト一塁、二塁』

「ナイスピッチャー」

牧野が横山に向かって声をあげた。

「よし、予定通りだ。あとは三番だ」

川田がベンチで呟いた。

「やったねー、敬遠策、成功ね」

未来が両手を上げて喜んだあと、川田に握手をもとめてきた。

「監督、まだですよ。次のバッターをおさえないと、敬遠策成功とは言えません」

川田がグラウンドを見つめながら、真剣な表情で未来に言った。

「そうかー、次のバッターね」

「はい、強打者ですから、注意しないとイケません」

『打ったー、強い打球、ピッチャーの足元を抜ける。セカンド都筑くんが回りこむ。あーっ、都筑くん、ボールをはじいたー。ボールはセンターへと転がっていく。二塁ランナー野々村くんは三塁をまわってホームへ向かう。センター植田くん、ホームに投げることが間に合わない。サヨナラ、サヨナラー。光陰高校サヨナラ勝ちー。東上学園、最後にミスが出ました。セカンドの都筑くんは立ち上がれない』

牧野がうずくまる都筑の元に行って顔を覗きこんでいる。

「都筑、お疲れ」

牧野が都筑の肩に手を置いた。

「すまん、俺のせいで負けた」

都筑は立ち上がろうとしない。

牧野が都筑を抱え立ち上がらせた。

「お前のせいじゃない」

「俺がはじいたから、はじかなかったらアウトだった」

「あれはセンター前ヒットの打球だ。お前の守備範囲が広いから追いつけたんだ。だからエラーじゃない」

「ごめんな、牧野」

「謝んなよ。俺は負けたけど、今日の試合がこれまでで一番楽しかった。高校最後にこんな痺れる楽しい試合ができてよかった。さあ、整列しようぜ。俺たちは胸はっていい試合だ」

監督ラストミーティング

「みんな、お疲れ様でした。甲子園を目指して毎日遅くまで練習してたのに一回戦で負けてしまって、わたしはとても悔しいです」

未来はそこで言葉を切って目頭をおさえた。汗と涙を拭う。

未来の前に並ぶユニフォーム姿の大男たちもずっとすすり泣いている。

「でも、わたしの悔しさなんてあなたたちに比べたら小さなものだと思います。あなたたちはわたしなんかより長い間、厳しい練習をして頑張ってきていたんだから」

「カントクー」

誰かが泣きながら叫んだ。牧野なのか、高塚なのか、横山なのかわからなかったが、その言葉に胸がつまって、次の言葉が出ない。

また汗と涙を拭い、胸に手を当て落ち着いてから、また話す。

「たったの三ヶ月間だけだったけど、あなたたちの甲子園出場という目標を達成するために、わたしは役に立ちたかった。でもできなかった。最初にあなたたちから言われた通り、わたしでは力不足すぎました。あなたたちを手伝うどころか邪魔ばかりしてしまいました。ルールは知らないし、ノックするにもバットの持ち方すら知らない。そんなわたしのせいで、あなたたちに負担をかけてしまいました。本当にごめんなさい。監督がわたしじゃなければ、あなたたちは、この夏もっと勝てたかもしれない。もっと野球を楽しめたかもしれない。夢だった甲子園に行けたかもしれない。そう思うと、わたしは申し訳ない気持ちでいっぱいです。ごめんなさい」

未来はそこで深々と頭を下げた。

「カントクー」

また声が飛んだ。その言葉を聞いて、また感極まってしまう。涙が出てくるのをおさえる。

気持ちを落ち着かせてから話を続けた。

「でも、わたしは短い期間だったけどあなたたちといっしょに野球ができて幸せでした。あなたたちを見てて野球が大好きになりました。野球の難しさ、面白さをあなたたちから教えてもらいました。あなたたちといっしょに過ごせた日々は本当に幸せでした。本当にありがとう。そして、最後まで役立たずで本当にごめんなさい」

未来はもう一度深々と頭を下げた。汗と涙がポタポタと落ちる。

この三ヶ月間のことを思い出す。

頭を上げると、前に並ぶ大男たちもみんな顔をグシャグシャにして泣いていた。

キャプテンラストミーティング

キャプテンの牧野はタオルで汗と涙を拭ってから、みんなの前に立った。

「みんな、お疲れ」

牧野はそれだけ言ってタオルで目頭を抑え下を向いた。牧野の肩がヒクヒク上下している。

牧野は顔を上げようとしな。みんなは牧野の様子をしばらく見ていた。

心配になった未来が牧野の元へ一歩踏み出した時、牧野が顔を上げた。彼はみんなに向けて無理に笑顔を作ってから話を続けた。

「俺たち、毎日必死で練習してたのに、結果は残念ながら一回戦敗退でした。応援してくれた方に申し訳ない気持ちでいっぱいです。すいませんでした」

牧野は坊主頭を下げた。

「なぜ俺たちはこんなに弱いのか、この三ヶ月間いろいろと考えました。中学時代の俺たちはみんなエースや主力バッターばかりでした。中学の頃の俺たちの目標は、もちろん高校に入ったら甲子園に行くことでした。そんな俺たちを三次監督がこの学校に誘いました。女子高から共学に変わる一年目、三次監督は俺たちが三年生になる年に、俺たちを甲子園に連れていくと約束してくれました。俺たちもそのつもりで一年から必死で練習しました。しかし、なかなか勝てませんでした。みんな実力のある選手ばかりなのに、なかなか勝てませんでした。三次監督には負けるたびに怒鳴られました。殴られることもありました。俺たちが最上級生になった去年の秋の大会からは絶対に負けられないと思っていました」

そこで牧野は言葉を詰まらせ目頭にタオルを当てた。

「頑張れー」と保護者から声が飛んだ。

牧野は顔を上げてから、声のした保護者の方に向かって小さく頭を下げた。

「でも去年の秋も簡単に予選で負けてしまいました。負けた日、学校に帰ってからグラウンドで、一時間正座させられました。九回にエラーから逆転されて負けた試合でした。あの時、俺はエラーした奴のせいで負けたと思ってました。正座させられている間、エラーした奴を恨みました。その日、ピッチャーは野手に向かって言いました。打てなさすぎや、守備範囲が狭すぎや、キャッチャーが何も考えんとサイン出すからやと。野手はピッチャーに言いました。コントロール悪すぎや、スタミナ無すぎや、リズム悪すぎやと。誰もが試合で負けたことを他の奴のせいにしていました。レギュラーをはずされたらグラブを投げつけました。バットを叩きつけました。今思えば、そんなチームが勝てるわけないんです。俺たちはそれに気づくのが遅すぎました。それに気づかせてくれたのは未来監督の姿を三ヶ月間見てきたからです」

そこで牧野は未来の顔をじっと見た。牧野の目は真っ赤だ。

「未来監督は野球を全く知りませんでした。最初は邪魔だと思いました。未来監督に向かってきついことも言いました。けど、未来監督はずっと俺たちのためになることをしようとしてくれてました。未来監督は休み時間や家に帰ったあと、野球のルールを覚えるために本を読んでいました。練習の後、バットやボールをいつもきれいに磨いてくれていました。手の豆がつぶれて血まみれになりながらノックの練習をしていました。休みの日は他の学校の試合を視察に行っていました。試合の日は俺たち全員におにぎりを作ってくれました。未来監督のそんな姿を見てこれが俺たちに欠けてることだとやっと気づきました。この夏はそれに気づかせてくれた未来監督をどうしても甲子園に連れて行きたかった。未来監督に甲子園の素晴らしさを体験してほしかった。でも、出来ませんでした。未来監督、本当にごめんなさい」

牧野は未来に向かって深々と頭を下げた。

「二年生をお願いします。次のキャプテンは川田にやってもらいます。来年は川田を中心に強いチームを作ってください。川田なら絶対に出来ます。未来監督を甲子園に連れて行ってあげてください。二年生はこれから一年間あります。チームとして強くなるために、俺たち三年みたいなバラバラなチームじゃなく、みんなで力を合わせて甲子園を目指してください。俺たちは甲子園には行けなかったけど、未来監督のおかげで、これからの人生に役立つ経験ができました。未来監督、本当にありがとうございました」

牧野は深々と頭を下げた。

そこにいる全員から拍手喝采がおこった。

ラストミーティング

著 まつだつま

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
